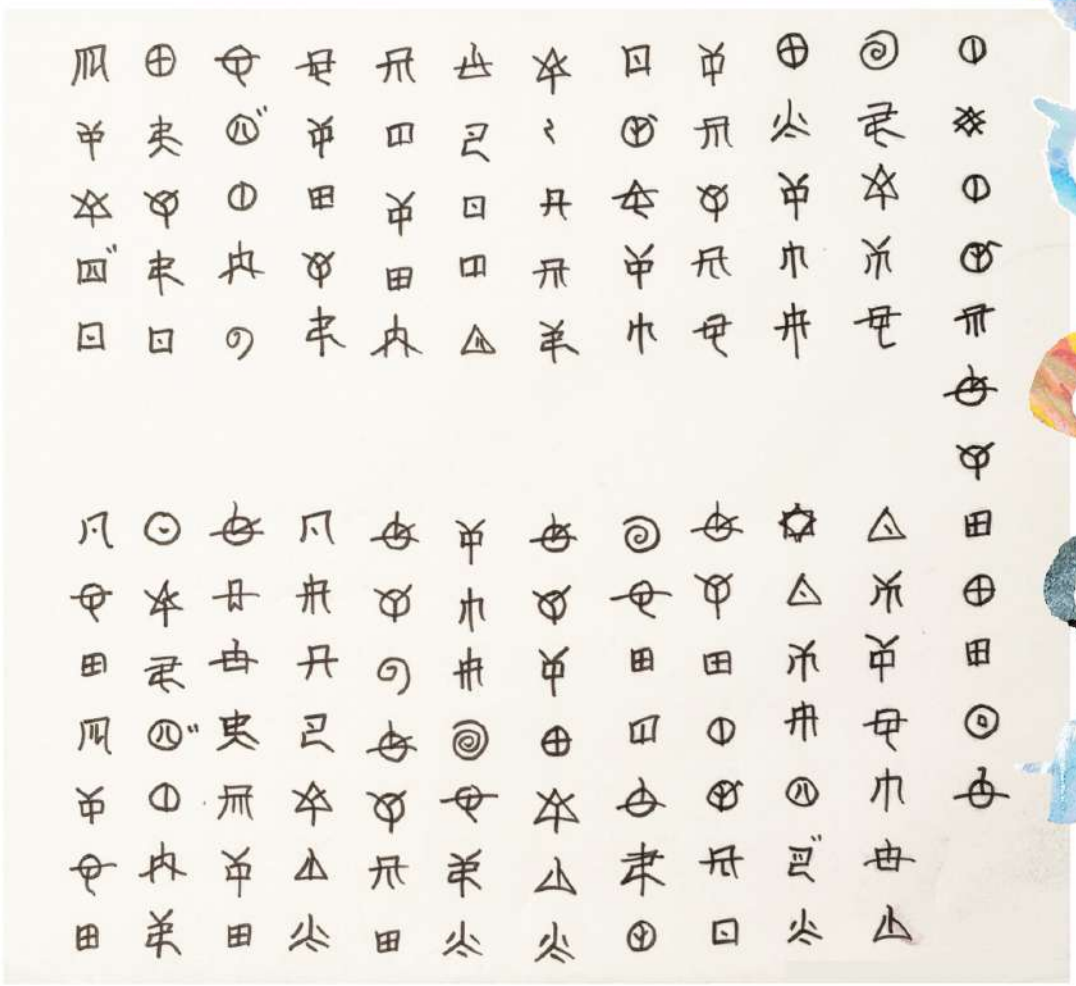


神鏡八咫の名の文

御機の十七

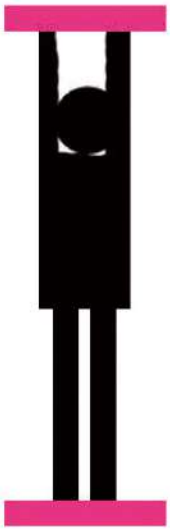
ホツマ道主宰　/　訳　ワアミ

神鏡八咫の名の文



アメツチモ ウチトモキヨク 天地も 内外も清く
ナルトキニ ヲウチニハベル 成る時に 大内に侍べる
トミタミモ ヤタノカガミオ 臣民も 八咫のカガミを
オガムトキ アマノコヤネガ 拝む時 アマノコヤネが
ツツシミテ ヤタトナヅクル 謹みて 八咫と名づくる
ユエオコフ トキニアマテル 故を乞ふ 時にアマテル
ミコトノリ ヤタハヤミタノ 勅 「八咫は八民の
モトノタケ イニシエツクル 元の身長 昔 作る
マハカリハ ヤソヨロヒトノ 間許りは 八十万人の
ナレタケオ アツメハカリテ 成れ身長を 集め計りて
ヒトツボオ イマノヒトマノ 一坪を 今の一間の
モノサシゾ コノマバカリオ 物差しぞ この間計りを





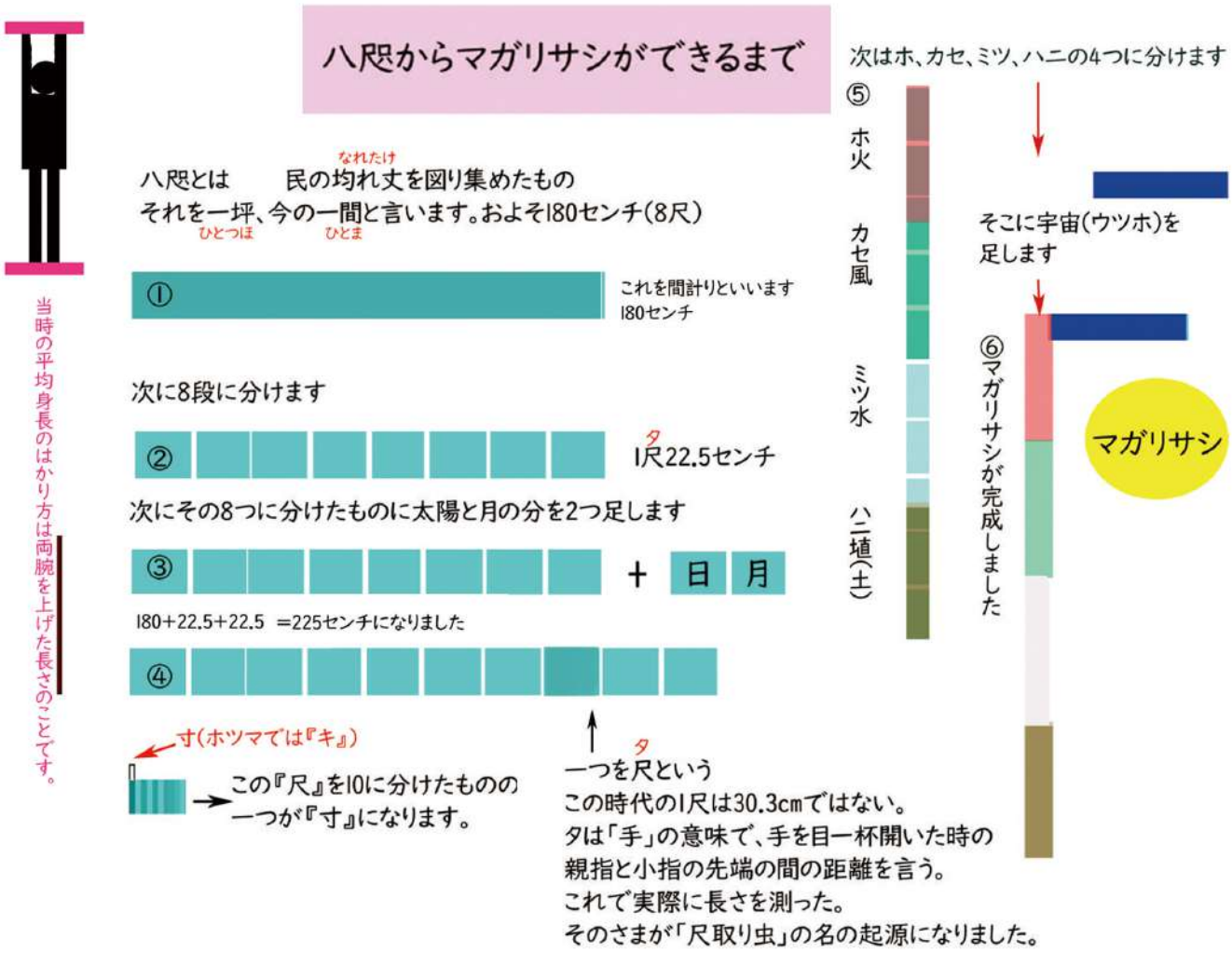
当時の平均身長のはかり方は両腕を上げた長さのことです。

陽と陰が偏ることなく、健やかに調和していた時のことです。
大内宮に仕える臣や民にも、「ヤタの鏡」を拝観することが許されました。そこでアマノコヤネが、謹んで尋ねます。
「なぜ、この鏡を『ヤタ』と呼ぶのでしょうか」
すると神は、穏やかに御言宣(勅)されました。
「ヤタ（八尺）」とは、もともと国の民の平均的な身長を表すものでした。いにしえには、八十万人もの人々の身長を調べ、その平均をもとに「一坪」という長さを定めたといいます。
これは今でいう「一間」にあたります。その一間を八つに分けたものを、一尺としました。つまり、一間は八尺です。
さらに、そこへ陽と陰を表す二尺を加えて一丈とし、人の身長を計るモノサシとしました。





モノサシゾ コノマバカリオ 物差しぞ この間計りを
ヤキダワケ コレニヒツキノ 八段分け これに日月の
フタタマシ ヨノヒトガラノ ニタまし 世の人体の
タカバカリ タオトツダキリ 高計り タを十ダ切り
キトナヅク タミハヤタナリ キと名づく 民はヤタなり
タカバカリ ホカゼハニミズ 高計り 火・風・埴・水
ヨツニワケ ウツホノヒトツ 四つに分け 空の一つ
ツギアワセ アマノメグリノ 継ぎ合せ 天の巡りの
マガリザシ コレデヒトミオ 曲り差し これで人身を
イタカント マルメテワタリ 抱かんと 丸めてワタリ
フタタタル カガミハミヤノ ニタたる カガミは宮の
ミハシラニ カミオマネクノ 御柱に 神を招くの



そして一尺をさらに十に分け、それを「キ（寸）」と名づけました。
ですから「ヤタ」とは、民そのものを表しているのです。
また、高さを計る一丈を、火・風・埴・水の四つに分けると、 それぞれ二尺半になります。
そこへさらに空の二尺半を加えると、全部で十二尺半になります。
これを丸く輪にすると、天体の巡りを見るための円形のモノサシになります。

そして八尺、つまり民の心を抱くために、この円を丸めて直径二尺となる鏡を作り、皇宮の中柱に据えました。

これが、民の魂と魄を招き入れる「ヤタの鏡」です。

別の言い方をすれば、「タ」というヲシテには、天や父が足らし助けるという意味があります。

その「タ」の形を持つ円い鏡に、八尺の身である民の心を映すのです。

つまり「ヤタの鏡」とは、民の魂と魄を映し、その明るさも暗さも見る「ヤタの明暗見」という意味から付けられた名前なのです。

マガリサシを使い円周が八咫の長さがになる鏡を作りました。



(180÷3.14=57cm)

直径57センチの鏡が出来ました。



カガミは神を招くために御柱に取り
付けました。
八民の心が入るために
民の均れ丈を用いたのです。





カ　カ　太陽・光・明るい

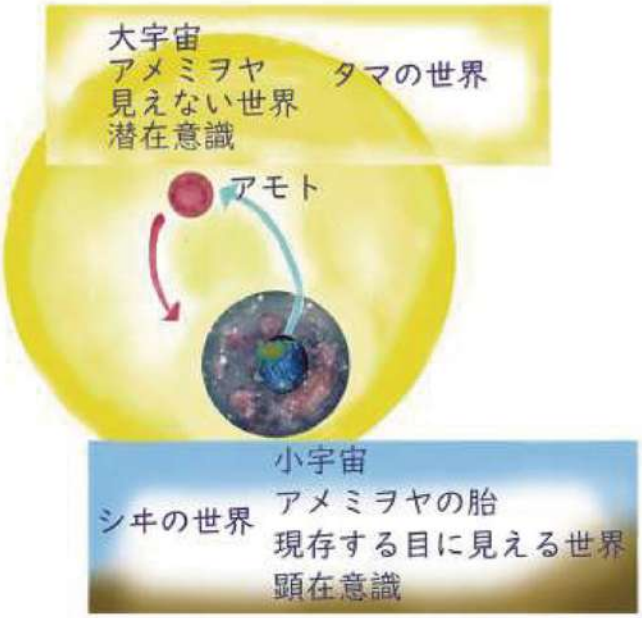


ガ　ガ　闇・我・暗い



ミ　ミ　見る
顧みる
省みる

民の心の明暗を見る、陽陰を見る、
真実を見る、魂とシヰを見る、全てを見る



ヤタの他の意味



ヤ　社、ムロ屋をクニトコタチが建てる時に
手印(タミメ)で『ム』と『ヤ』を結んだ
民を治す場所はヤカタ(屋形)

ヤ　ヤタ
カ　カガミ
タ　治す



タ　民を治す、助ける
タには三つの光あり、
日、月、星、天(アメ)と父、陽

ラ　母と地
タラで両親を表す

タミメ　手見。手合。　　=ニギテ(和手)・テガシハ(手柏)
四十九神を手の造形で表現したもの。手印。印相。
タミメを平面状に押し写したものがヲシテ(押手)。
「～手を結ぶ」とか言う。
【手印】シュイン　ー広辞苑よりー
両手の指で結んだ印。











ヤタカガミ イマワタリタノ ヤタカガミ 今ワタリタの
マルカガミ アテテヤタミノ 円カガミ 当てて八民の
ココロヰル ヤタノカガミノ 心ヰる ヤタのカガミの
ナニヨルナ ワレキクイニシ 名に由る名 われ聞く昔
カミノヤハ ムノタミメヨリ 神の屋は ムのタミメより
ムロヤタツ タミニヲシエテ ムロ屋建つ 民に教ゑて
ヤネオナス マタヤノタミメ ヤネをなす 又ヤのタミメ
ヤシロナル イマミヤトノニ 社なる 今宮殿に
タミオタス ヤツハヤカタゾ 民を養す ヤツはヤカタぞ
タノオシテ ミヒカリマルノ タの璽 三光 円の
ウチニヰル タリタスクノリ 内に入る 養り助く法
アメトチチ ウエシタカエス 天と父 上下返す

ヤタの他の意味



ヤ　社、ムロ屋をクニトコタチが建てる時に
手印(タミメ)で『ム』と『ヤ』を結んだ
民を治す場所はヤカタ(屋形)

ヤ　ヤタ
カ　カガミ
タ　治す



タ　民を治す、助ける
タには三つの光あり、
日、月、星、天(アメ)と父、陽

ラ　母と地
タラで両親を表す

私が聞くところによれば、いにしえの君の住まいは、「ム」のタミメ(手印)を結んでムロ屋を建て、それを民にも教えたことから、家屋の始まりとなりました。

また「ヤ」のタミメからヤシロが生まれ、今では宮や殿から民を治めています。

けれども、ただ上に立てばよいのではありません。
民を足らし、助け、健やかに整えていくことこそ、上に立つ者の務めなのです。

「タ」というヲシテの形には、三つの光が円の中に入っています。

これは、足らし助け、養う「天と父」の道を表しています。



ラノオシテ　ツチトハハノリ　ラの璽 地と母法
ヲヤガコオ　ハラメバチタル　親が子を 妊めば乳足る
チチハハハ　ゲニタラチネヨ　父母は げにタラチネよ
タモヲシモ　チナキノタラヨ　タもヲシも 乳なきのタラよ
カンガミテ　タスクルタミハ　鑑みて 助くる民は
コノゴトク　ヤタハヲヲヤケ　子の如く ヤタはヲヲヤケ
イニシカミ　ツクリサヅクル　昔 神 造り授くる
トホコアリ　トハトトノフル　ト・ホコあり トは整ふる
オシテナリ　フタカミウケテ　オシテなり 二神受けて
ヲヤトナリ　タミオワガコト　親と成り 民を我が子と
ソダツルニ　アツクヲシエテ　育つるに 篤く教えて
ヒトトナス　ヲシエテモナオ　人となす 教えても尚



ラの璽（ヲシテ）



そして、「タ」の文字を上下逆さにした「ラ」のヲシテは、「地と母」の道を表します。

親が子を宿せば、母には乳が備わります。
父と母は、子に必要なものを与え、育てていく根なのです。
だから母の事を「タラチネ」ともいうのです。
同じように、民を足らし助け、養い、治め、教える人もまた、お乳こそ与えませんが、民にとっての親だと考えることができます。

そう考えるならば、君や臣が助ける民は、自分の子と同じなのです。また「ヤタ」には、民を養い育てる立場である「公」という意味もあります。

いにしえの国君が造り、代々受け継いできたものに「経（ト）」と「矛（ホコ）」がありました。
経とは、人々を調和へ導く教えです。
二尊(イサナギとイサナミ)はそれを受け継ぎ、民の親、つまり「公」となりました。

そして民を我が子と思い、手厚く教え、人として育てました。
それでもなお教えに逆らう者があれば、罪や咎(トガ)を正します。

経＝ト、トの教え・整える教え、調える教え



=稲・ソロ

サカラハバ ウチホコロバセ 逆らはば 打ちホコロバセ
ツミトガノ タダシモトホギ 罪・科の 糺しもとほき
アメトツチ トドカヌコトヲ 天と地 届かぬことを
オモフナリ トミラヒメモス 思ふなり 臣らヒメモス
ウマナクテ ヲシヱオツネノ 倦まなくて 教ゑを常の
ワザトナセ トミタミコマゴ 業となせ 臣民・子孫
ヘタテナク キツクメグマン 隔てなく 慈く恵まん
オモヒナリ オシエヌモノは 思ひなり 教えぬ者は
トミナラズ オシヱウケヌハ 臣ならず 教ゑ受けぬは
タミナラズ ツネニオモエヨ 民ならず 常に思えよ
アマノリオ ヱテミオヲサメ 天法を 得て身を修め
タガヤシテ ソロオウヱマキ 耕して ソロを植ゑ蒔き



臣（トミ）＝トの教えを

教える身



けれども親と子の心が遠く離れてしまえば、思いを通わせることは難しくなります。

だから臣たちよ、途中で嫌になったり諦めたりせず、「教えること」をいつもの務めとしなさい。

ここでいう教えとは、臣も民も、子も孫も分け隔てなく、慈しみ、恵もうとする心です。

教えようとしない者は臣とはいえません。

また、教えを受けようとしない者も民とはいえません。

いつも心に留めておきなさい。

民もまた陽と陰の法を受けて自分の身を整え、田畑を耕し、作物を植え、草を刈り、収穫し、税を納めて暮らしています。

その民は、我が孫のようなものです。



クサキリテ　カリヲサムミノ　草切りて　刈り納む身の
タミハマコ　タクミアキドモ　民は真子　工人・商人も
ヒコヤサゴ　モノシルトテモ　曽孫・玄孫　物知るとても
ウグメカデ　トノミチビキニ　蠢かで　トの導きに
ヰラザランオヤ　ヰらざらんをや
ワレニミル　ヲサマルミヨハ　われみるに　治まる御世は
ナノキコヱ　ヒトノココロバ　名のキ肥ゑ　人のココロバ
オヨソコシ　アラハニツトメ　凡そ濃し　現はに努め
ウラヤスム　ナカニヒトリハ　裏休む　中に一人は
ウラナクテ　アメシルキキノ　裏なくて　天知る木々の
ハナモミモ　ワガミノミチト　花も実も　わが身のミチと
シラザラメ　オカシカクスモ　知らざらめ　犯し隠すも



蠢く（うごめく）
「春」の下に「虫」が２つ。
春になって虫たちが動き出す
様子を表す漢字

民もまた陽と陰の法を受けて自分の身を整え、田畑を耕し、作物を植え、草を刈り、収穫し、税を納めて暮らしています。
その民は、我が孫のようなものです。

物を作る工人や、物を売り買いする商人も、我が曽孫、玄孫のようなものです。

それならば、彼らより多くのことを知る臣たちが、どうして人々を調和へ導くために力を尽くさずにいられるでしょう。

私が見るところ、よく治まった世では、人のよい評判が自然と耳に入り、人の情も厚くなります。

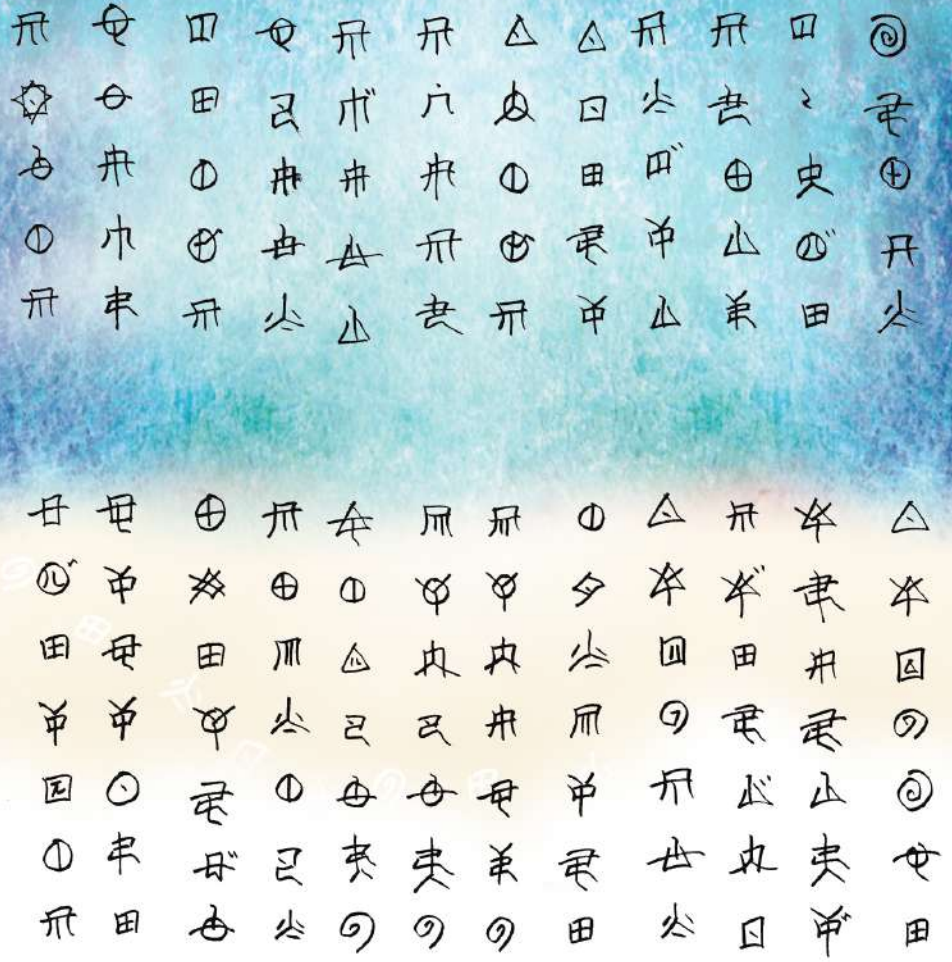
隠し事をしないよう努めるので、人々の心も穏やかです。

けれども、その中にはまれに、物事の道理がわからない人もいます。
木々が花を咲かせ実を結ぶところにまで働いている陽陰の法が、自分自身にも働いていることを知らず、決まりを破り、それを隠そうとするのです。



陽陰の法

ここでの意味は木々の花は誰に
命令されることなく
季節が巡るごとに
芽を出し花を咲かせること



アメガシル　ウツボハアマノ　天が知る 空は天の
ココロバノ　ツネニメグレド　ココロバの 常に巡れど
ミエナクテ　ミヅノメグリオ　見ゑなくて 水の巡りを
ミルゴトク　ウツボハミユル　見るごとく 空は見ゆる
ウオトメノ　カワルヒトメノ　魚の目と 変る人目の
ウラカガミ　ヒタリニモテバ　ウラカガミ 左に持てば
ミギニミエ　ヒタリエヤレバ　右に見え 左えやれば
ミギニユク　ムカフエヤレバ　右にゆく 向ふえやれば
マエニヨル　ミナヒルカエル　前に寄る みな翻える
コノカガミ　ナンノタメゾヤ　このカガミ 何の為ぞや
マサニキケ　モトモトアケノ　正に聴け もともと明の
ミヲヤカミ　ソバノトホカミ　御親神 側のトホカミ



しかし、アメノミヲヤにはすべてお見通しなのです。
人の行いはどこに現れるのでしょう
地上には、アメノミヲヤにつながる仕組みが張り巡らされ、
いつも働いています。

けれども、それを人の目で見ることはできません。
水の中にいる魚が、水そのものを見ることができないように、
人も空の中にいるため、空気そのものを見ることができないのです。

鏡を見ると、左は右に、右は左に映ります。
向こうへ動かしたものが、こちらへ寄ってくるようにも見えます。

なぜ鏡は、このようにすべてを反対に映すのでしょうか。
よく聞きなさい。

もともと明るきアメミヲヤ神は、その側にいるトホカミヱヒタメの八元の神に、人の命を守らせました。





ヱビタメノ　ヤモトノカミニ　ヱビタメの　八元の神に
マモラシム　ヒトノネコエハ　守らしむ　人の音声は
アナミカミ　ミソフノカミノ　天並神　三十二の神の
ミメカタチ　ソフヨロヤチノ　耳目形　十六万八千の
モノオシテ　ヒトノタマシヰ　モノをして　人の魂
ヨロコバス　トキニモトムル　喜ばす　時に求むる
ウマレツキ　ソムヨロヤチニ　生れつき　十六万八千に
シナカハル　アオヒトクサハ　品変る　青人草は
コトゴトク　アメノミオヤノ　尽々く　天の御祖の
タマモノト　マモラヌハナシ　賜物と　守らぬはなし
フタカミノ　トホコニヲサム　二神の　トホコに治む
トシフレバ　ニブナレトキノ　年経れば　鈍・並・鋭の



元々明のアメミヲヤ神は、その側にいるトホカミヱヒタメの八元の神に、人の命を守らせました。

人の身体は天並神(アイフヘモヲスシ)に守らせ、三十二の神には、人の見た目や形を守らせます。

さらに十六万八千のモノ(個性、特質、可能性)を添えて、人の魂と魄を養い、豊かにしました。

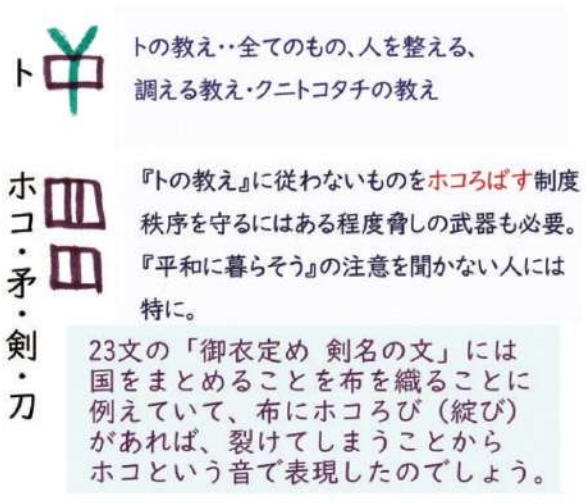
そのため、人の生まれ持った性質には十六万八千もの違いがあります。

けれども、青人草、つまりすべての民はアメノミヲヤの末裔です。

ですから、守られていない人は一人もいません。

二尊が経と矛(トホコ)の道によって国を治め、長い年月がたつと、民の中にも「鈍・均・鋭」(劣・中・優)という資質や能力の違いが見えてきます。

二尊とは二神、イサナギ、イサナミのこと





古い神社にはこの形がまだ残っています

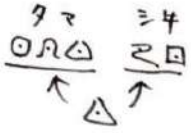


西宮市廣田神社

フトマニは５つの円で構成されています。
この５つの円で宇宙の循環や人間の心身を表しています







1.中心　アウワ　宇宙が生まれる大元の力
　　モトモトアケ・モトアケ・ビッグバン

2.2周目　トホカミエヒタメ　「人の命を支えるタマノヲを守る」
　タマノヲとはタマとシキを結いやわすもの(14アヤ)
　記憶の機能を持つ(DNA)

3.3周目　アイフヘモヲスシ　東西南北の方角(季節)と人の内臓を司る

4.4と5周目は人の見た目、肉体を司る　32文字の組み合わせ16通り

5.2周目は2文字を挟んで外円に向かう形で書かれていて繋ぐと
左巻きの渦巻きになる。

6.3周目は2文字を挟んで内円に向かう形で書かれていて繋ぐと
右巻きの渦巻きになる。

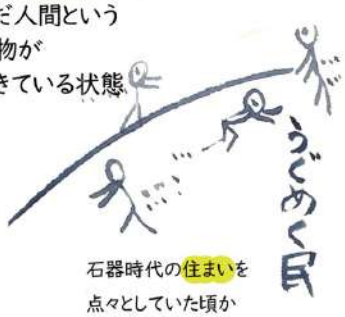
フトマニ教本より

フトマニの中央「アウワ」について

アメミヲヤから見て
指導者が地球に
必要と考えられて



社会・国といったものがない
ただ人間という
動物が
生きている状態



石器時代の住まいを
点々としていた頃か

ホツマツタヱ天地創造

アメミヲヤ



ア

五元素が生まれる

クニトコタチが地上に
完全な人として降り立つ



クニトコタチはまさに
クニを作るために
降臨した



クニをトのおしえによって固めて建てた

クニトコタチはトの教えを基に
人を導きムのタミメでムロヤを建てて
住居というものを民に教えた
青森の三内丸山遺跡には実際に
栗の栽培をした跡がある



ミナカヌシは地球のあちこちに
人をたくさん置いた





アメノミナカヌシとも言う
五元素を持った人間でもあり
アメミヲヤが転身した神でもある
半神半人と言われる